

モスクワ訪問記 カプースチンに会う

数年前からCDや演奏会などで紹介されているので、その名前を聞いたことがある人もいるだろう。現代に生きるロシアの作曲家、ニコライ・カプースチンに会ってこれることができた。私がこの作曲家の音楽に出会ったのは、「カプースチン 自作自演集 vol.1」という(株)トライエム社から出されたCDの中から、「8つのエチュード 作品40」を聴いたのがきっかけであったが、その時の衝撃はまだ忘れられない。今まで聴いたこともないピアノ音楽。それまで聴いていた音楽が、一瞬にして色あせてしまうほどの感動を覚えた。それは、なんと「ジャズの語法を駆使したクラシック音楽」とも言えるものなのである。モスクワ音楽院出身という経歴を持つこの作曲家は、純粋にクラシックのロシアン・スクールの流れを汲んでいいる。音楽院時代には、プロコフィエフ、バルトーク、ラヴェルに夢中になったあとは、もう自分の興味を惹く音楽はジャズ以外にはないことを知った。特にこのエチュード集は、クラシックでは決して有り得ないリズムが魅力的である。他の作品も興味を持って聴いていくと、多くを占めるピアノ曲のほかに、室内楽曲など素晴らしい作品がたくさんあることを知った。作品番号の付いている108曲の中には、ピアノ協奏曲も6曲存在する。

今年の4月下旬に、モスクワでカプースチンによる自作自演の新しいアルバムのための録音が行なわれた。その時に同行させていただき、録音の様子や、作曲家の素顔に接した時のことをレポートしてみたいと思う。



▲作曲家直々にレッスンを受ける筆者

モスクワ国営放送局のスタジオで4日間にわたって、録音セッションが行なわれた。私が見学できたのは3日目の「ピアノソナタ第12番」



▲録音風景

の収録の日であった。このソナタは、比較的近年の作品だが、作風の衰えもなく、第2楽章などのアレグロの速いパッセージやコーダなどは、作曲家自身にとっても相当難しいものであるようだった。録音を聞けばわかるが、氏は作曲家であると同時に、素晴らしいピアニストでもある。しかし、演奏することは作曲をするのとは違って、やはり準備に大変な時間を要したようである。録音日の前は、6ヶ月間ほど作曲の筆を休めて練習したと言う。

さて、録音の撮り方であるが、ソナタは長いので、最初に一つの楽章を半分ずつ弾いたあとは、細かいテイクを撮っていくというようなやり方で



川上 昌裕

ピアニスト・国際委員会協力委員

ホームページアドレス

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/pianistas/>

※さらに詳しい訪問記がピティナ・ホームページ「ピアノの広場」にもあります。(「カプースチン訪問記」<前編>・<後編>)興味のある方はそちらもご覧ください。
⇒ <http://www.piano.or.jp/enc/special/moscow1.html>

あった。そのテイクは一曲につき数十にも上る。まさか、あのような難曲を何度も通して弾くことは考えられなかったが、その予想は当たったようである。ちなみに、楽譜はピアノのそばに置いてはあるがほとんど見ていない。作曲者であるから当たり前の話であるが、音やリズムに対してとても厳格で、一つでも間違っただけなら納得いくまでテイクを撮りなおすという姿勢には頭が下がった。

しかし、面白いこともあった。ソナタの収録のあと、小品を一曲撮っていたのだが、作曲家は、ある箇所を楽譜と違うリズムで弾いていたのだ。モニター室で譜面をチェックしながら撮っていたイワノフ氏と、他のスタッフたちによってその部分を指摘された。「おお、偉大なマエストロにそんなことを言うとは!」と私は驚いたが、楽譜というものが残される以上、作曲者が自分の書いた通りに演奏をすることは当然である。結局、正しいリズムに直して弾き、そこを撮りなおすことになった。カプースチン本人にしてみれば、あまりにも多くの曲を書いてきたのだから、そのすべてを精密に覚えているわけでもないであろう。しかし、この一件は、私にはとてもほほえましく、こんな光景を観たことでカプースチン氏に対して好感を抱いた。

さて、作曲家から直接にアドバイスをもらえる機会なんてそんなにあるものではないだろう、ということで、私はちょうどレパートリーにしていた「ソナタ第1番(ソナタ・ファンタジー)作品39」と「トゥカティーナト長調」を演奏し、作曲家本人に聴いてもらった。さすがに緊張はした

が、カプースチン氏は黙って最後まで聴いてくれた上、いくつかのアドバイスをまでしてくださった。今年66歳を迎える彼は、もうあまり国外へ出かけることも少ないようであるから、会うためにはこうしてモスクワまで会いに来る以外にはないだろう。日本から今回、私を含む彼のファン(5人で)が訪ねたことで、どれだけ彼が喜んでくださったかはわからない。しかし、今後さらに世界から多くのピアニストたちがこの作曲家に興味を持ち、モスクワを訪れるようになってほしいし、まだ未出版の優れた作品の楽譜が、次々と世に出されることを切に願っている。

難易度は決して低くはないが、最もポピュラーな、「8つのエチュード 作品40」などの楽譜がすでに日本でも手に入る。ショパンのエチュードのように最高度の音楽性を求められる曲ももちろん大切だが、なんと言っても斬新なジャズのハーモニー、揺るぎないテンポ感や、スイング感などの、鋭敏なリズム感とテクニックをまず養いたいと思う人には、うってつけの名曲である。演奏効果と練習効果の高いエチュードとして、クラシック音楽を学ぶ多くの若者がチャレンジするようになってくれたら嬉しいと思う。



▲会食後の記念撮影